

---

# 頑張れ女の子

一宮みや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

頑張れ女の子

### 【ZPDF】

Z6384D

### 【作者名】

一宮みや

### 【あらすじ】

バレンタインディ。一年に一度だけのこの日。大好きな先輩に思いを告白したい。普段は恥ずかしくって言えないけど、この日だけは言える気がする。だって、バレンタインディって、その為にある日なんだから・・・。

『学校にチョココレートを持ってきてはいけません』と、昨日のH.R.で先生は言っていたけど、それじゃあ、一体、いつ先輩にチョコを渡せば良いと言うの？ サブバックの中に入っている小さな箱の存在を、あたしは布の上から、そつと確かめる。

昨日、お兄ちゃんからの妨害にもめげず、夜中までかかって一生懸命作った先輩へのチョコレートケーキ。

勿論、形はハートで、甘いものが苦手な先輩でも食べられるように、スポンジには純正の甘くないココアを使ってあるし、間に挟んだ生チョコには、お酒が好きだって言つてた先輩に喜んで貰えるように、お父さんのブランデーをたっぷりと入れてあるの。しかも、ケーキのコーティングに使つたチョコは、思い切りビターな高い奴なのよ。

それに、ケーキを入れた箱だつて、雑誌の特集記事を見て、余計な折り目の一つも付かないように慎重にラッピングして、リボンも先輩の好みそうなシックな奴を選んで、格好良く結んであるの。

もう、そこら辺に売つてるチョコ並、ううん、それ以上に完璧に仕上がつてるんだから、あたしのチョコ。我ながら、その出来映えに惚れ惚れするくらいだわ。

先輩だつて、これなら受け取つて、……食べててくれるわよね？ きゅっと、胸の前で拳を握る。

そう、後は、これを先輩に受け取つて貰うだけ。問題は、……いつ、これを先輩に渡すかつてことだけ、なのよ！

あたしの、チョコを渡したい先輩、崇光忍先輩は一年生。あたし達、一年生の一つ下の階にいるの。用事もないのに、そんな所には行けないわ。ううん、用事があつても、やっぱり上級生の階に行くのは、ちょっと氣後れしちゃう。

今日は、朝からチャンスがあればいつでも先輩に渡せるよつにと思つて、休み時間も教室移動の時も、サブバックを持つてウロウロしてたんだけど、……先輩には遭えなかつた。

本当は昼休みに学食で先輩を見かけたんだけど、いくらなんでも、昼休みの学食の中では、あまりに人の目がありすぎて、ちょっと勇気が出なかつたわ。

そして、今に至つてるつて訳。

やつぱり、渡すのは放課後の部活の時になつちやつた。

先輩は、あたしの入つてる美術部の部長なの。一見、無愛想で目つきも鋭くて、怖い印象のある先輩なんだけど、凄く優しい絵を描くのよ。水彩画を主に描いてる人なんだけど、色の使い方が凄く綺麗で、柔らかい印象を与えて、こんな絵を描く人は、きっと優しい人なんだろうなつて思つてしまつ、そんな絵をね。

つまり、見た目の先輩とは、全然違うの。……そこが、また良いんだけどね。

うふふ。

ちょっと照れちゃう。

でも、こんな所でにやけていたら変な人よねと思いつつ、顔を引き締めて辺りを見回してみる。オッケー、誰にも見られてない。てゆーか、美術室は旧校舎の一階にあつて、そこへ行く渡り廊下は、美術室に用の人しか通らないんだもの。こんな放課後に、ここを通るのは美術部員だけなのよ。

今日は何人来てるかしら？

あたしのクラスは、今日は帰りのHRが長かつたから、きっと先輩はもう部活に行つてゐるわよね。昼休みにあつた時に、今日は部活に行くつて言つていたもの。バイトは、その後で行くみたい。先輩のバイト先には、あたしは行けない。だから、もう、チョコを渡すチャンスは、この一時しかないの。

けど、やっぱり他の人もいたら、ちょっと恥ずかしいな。

どうやつて先輩に渡したらいいのかしら？ 出来れば、そつと誰

にも見つからない時に渡したかったんだけど、もう遅いわよね。

はふ。と溜息を吐く。

美術室までの渡り廊下が、今日はやけに長く感じる。

「う、頑張れ、あたし。

「愛花。何しているのよ、こんな所で？」

渡り廊下の真ん中で拳を握つて自分を叱咤してると、背後から声を掛けられた。

「由希亜？」

同じ美術部の由希亜。あたしの隣のクラスで、やっぱり先輩のことが好きな、あたしのライバル。

「あなたこと、何してますのよ。今日はバイトだつて言つてたじゃない！」

由希亜がいたら、先輩にチョコを渡すなんて絶望的だわ。だつて、由希亜つて、ことじとくあたしと崇光先輩の間に割つて入つてくるんだもの。今日は由希亜が部活に来ない日だから、あたし、部活の時に先輩に渡そつて思つていたのに。ヒドイわ。

由希亜は、あたしが先輩のことを好きなのを知つているの。けど、あたしが先輩を好きになつたのは去年の12月からだから、入学した当初から先輩のことを好きだつた自分が、レベルが上だと思つてるのよ。

好きになつたら、時間じゃないわよね？

もつとも、あたしと違つて由希亜は先輩に対し、実に堂々と『好き』って公言してるから、確かにレベルが違うんだけど……。

由希亜の、先輩に対する態度は、あたしには到底真似できないと思つもの。

「何つて、先輩にチョコを渡しに来ただけよ。心配しないでも、渡したら帰るわよ」

くすくすと笑つて、由希亜は面白やつに、あたしの顔を見る。

あたし、そんなに顔に出てる？

「バイトさえ無かつたら、とことん愛花の邪魔をしてやるとこなん

だけどねー

何よ、それ。

むうっと膨れてみせると、由希亜は更に面白そうに笑ったわ。

「ねえ、愛花も、まだ崇光先輩に渡してないんでしょう?」

猫みたいに大きな瞳を細めて、あたしの顔を覗き込む。

「……うん

」くくりと頷く。

「ふーん

あたしがそつまつと、由希亜は、あたしの抱えているサブバックに目を移した。

「ね、愛花のチョコ、ビニで買ったの?」

興味津々に覗き込むとする。

「あたしのは、……手作りだもん」

あたしは、由希亜の視線から逃れるよつて、サブバックを抱きしめた。

「手作り? わーお、やるじゃない愛花」

由希亜がビックリした声を上げる。

「あたしはティパートで買ってきた奴だよー」

そう言つと、サブバックの中から綺麗にラッピングされた箱を取り出した。

高そう。

由希亜は、あたしの視線に「先輩も食べられそうなチョコを探してたら、街中歩いちゃったわよ」と唇の端を歪めて笑つてみせた。

「やっぱ、本命チョコを選ぶのは、気合いが入るわよねー」

ふふん。と、勝ち誇つたよつて胸を反らす。

むう……。

けど、あたしのチョコだつて負けてないもん。

「由希亜、何を言つてゐるの。本命チョコつて言つのは、手作りチョコのことなのよ」

決めつけてやる。

「心を込めて、自分で作つて」いや、本命チヨコなのよ。愛が籠もつてゐる。買ったものじゃ、そつはいかないわねえ」

「其のまゝ、  
愛花」

あたしの仰向し、一瞬歯を噛みしめた由希里が、ふんと鼻を鳴らした。

「一本命チヨコは、手作りチヨコで  
か、お兄ちゃんがいなかつた?」

「え？ ……いる、けど？」

由希亞が何を言いたいのか分からない。

お父さんもいなわれぬね  
で」と正二 あなたの作二 た手作りチ二

死にはじめたの

二二二

た。

「あなたの先輩への本命チョコ、あなたの愛が籠もったチョコは、先輩だけのチョコでは無くて、お父さんとお兄ちゃんにもあげたものなんじゃないの?」

あたしに向かつて指を突き付ける。

「愛情は、恋愛感情ではなく家族への愛情と同じってことよね」「わざとらしく高笑いをしてみせる由希田の前に、あたしは敗北の一文字を見た気がした。

けど

「ちょっと、待つてよ。それなら買つてきたチヨ「だつて同じじやない。店で売つてる奴は、それこそ、誰の為にもある奴なんだから」「うつ、気が付いたか」

「うつ、気が付いたか？」

由希亜が膣を噛んだ。

「まあ、買つてきたチョコでも、自分で作ったチョコでも、渡す時に愛が籠もつてりやいいのよ、ね」

「うんうんと瞑目して頷いてみせる。

もう、なによ、それ。自分が言い出したくせ」。

「やつぱり、究極のチョコは、自分チョコな訳だしね

「はあ？」

また、訳の分かんないことを。

「だから、自分の体にチョコを塗りたくつて、『あたしをア・ゲ・ル』って、先輩に食べてもらひのよお～ ああん、うつとつ……。

いや、うつとつて。自分チョコって言つのは、誰にもやらないで、自分の為に買つ自分のチョコレートの事じやなかつたつけ？「由希亜、自分チョコつて、そーゆー意味じやないと思つわよ」前頭葉が異様に痛いわよ、それ。

「うつ？」

由希亜は本気なのか冗談なのか分からぬ満面の笑みで、「でも、絶対、先輩は喜んで受け取つてくれると思わない？」と拳を握る。「うーん……。それは、そう……かも知れないけど、その『自分チョコ』をあげる為には、大前提として、……先輩の前で、裸になつてなきやいけないのよね？」

「あたしは、もっと普通の方法で渡したいかなあ」

思わず想像して、顔が火照つてしまつ。

「そう？ あたしは、自分チョコを渡せるもんなら渡したいけどなあ」

まあ、由希亜なら、いつかやりそつで、怖いわよね。

「兎に角、先輩に渡す時に、どれだけ愛を込められるかってところが勝負の決め手よね。てことで……」

由希亜は、にやつと笑つと、突然ダッシュした。

「先輩にチョコを渡すのは、あたしが最初よー」

「あつ？！」とか思つた時には、美術室の扉を開けている。観音開きの扉が思い切りよく開いて、けたたましい音を響かせた。

「崇光せんぱあ～い」

そのままの勢いで部屋の中に駆け込んで行くと、由希亜はカンバスに向かつて座つてゐる先輩の背中に、ジャンプしてしがみついた。

「つるさいぞ、由希亜」

静かな声。

背後からいきなり抱きつかれた先輩は、絵筆を持ったままの姿勢で止まつてゐる。既に由希亜の行動には慣れっこな他のみんなも、一瞬顔を上げただけで知らん顔しているわ。

「先輩。はい、これ。あたしの気持ちで～す」

由希亜は、先輩の冷ややかな声にも全く動じず、首つ玉にしがみついたままで先輩にチヨコを押しつけた。

「いらん」

思い切り冷たい声。あたしだつたら、言われた途端、ショックで悲しくなっちゃうだらう声。

でも、由希亜は、「もつ、先輩つたら、照れ屋さん」なんて言つて、つん。と、先輩の頬を指先で突つついたりするの。

由希亜つて、本当に凄いと思つわ。

「いいから、離れる、由希亜」

「チヨコを貰つてくれるなら、離れて、あ・げ・る」

ひとつと、更に先輩の頬に自分の頬を寄せるようにしてくつつく。先輩が天を仰いだ。カンバスの陰で、西条先輩が笑いを噛み殺してるのが見えるわ。

「分かつたから。ほら、由希亜。貰つておくから、離れる」

先輩は絵筆を置くと、由希亜の手からチヨコを受け取つた。由希亜は、満面の笑みで、もう一度ぎゅっと抱きつくると、先輩から離れた。

「良かった。大事に食べて下さごね。あたしだと思つて、こいつにこいつと笑う。

「……お前だと思ったら、胸焼けを起しちゃうだな」「どーゆー意味ですか」

何を言われても、ここにことしている。強いな、由希亞。「じゃ、そーゆー」と。あたし、今日はバイトなんで、これで帰りますね

由希亞が、ぐるりと背を向ける。先輩は、その途端、手にしたチヨンを西条先輩に向かって「やるぞ」とか言つて投げよつとして、振り返つた由希亞に見咎められた。

「先輩！何してるんですか？」

思い切り怒られる。

「いや、別に」

口籠もる先輩が可愛い。

「西条先輩も、受け取つちや駄目ですよ。いいですか！絶対、先輩が一人で食べて下さいね！あたしの、愛が籠もつてるんですから」置み掛けるようにして、西条先輩と崇光先輩とを交互に睨み付ける。

「分かつたよ、由希亞」

「由希亞ちゃんの忍への愛を横から取つたりはしないよ。誓つてね」「一人とも宣誓をするように手を挙げている。それとも、降参のポーズなのかしら。

「あやめ先輩、見張つて下さいね」

辺りの騒動を、にっこり笑つた顔で傍観していた、あやめ先輩に向かつて、由希亞は手を合わせた。あやめ先輩は「はいはい」と、由希亞の言葉に頷いて見せる。

あやめ先輩は、いつでもにこやかな顔してて、頼りになる女子の味方なの。あたしが崇光先輩のことを好きなことも知つていて、さりげなく由希亞を先輩から遠ざけてくれたりするのよ。

だからと書いて、別に、あたしの味方をしてくれてる訳じゃあないんだけどね。先輩は単に面白がつてているだけなの。あくまでも、傍観者としてね。

「それじゃあ、ホントに、お先に失礼します」

由希亜は、そう言つと何度も後ろを振り返りながら先輩を牽制しつつ、美術室から出て行つた。しかも、最後の最後、入り口の所であたしの方を見て「お先に、愛花」と言つて、にやりと笑つてね。

「うう、負けないもん！」

あたしがイーゼルを置く位置は、先輩からちょっと離れているの。間には西条先輩と、今日は来ていなければ、彰君とか他の部員が2名いて、実は描いている途中に顔を上げると、先輩の顔がよく見える絶好のポジションだつたりするんだけど……、チヨコを渡すには、遠すぎる。せめて隣だつたら、先輩のバックの中に、こつそりと入れておくなんてことも可能だつたかも知れないのに。

「やれやれ」

由希亜颶風が去つた後、先輩は肩を落としてポケットから煙草を取り出した。小さな箱を指先で弾いて、一本飛び出してきた奴をくわえると、黒い細身のライターで火を点ける。

「由希亜にも困つたもんだな」

深く吸い込んで、溜息と共に、細く長く、煙を吐き出す。

「モテモテじやねーか、忍」

西条先輩が、にやにやと笑つてゐる。

「由希亜から貰つても、有難味がねえんだよな。食つか？」

「まあ、あれだけいつも、お前のことを好きだと連呼してたら、新鮮さには欠けるよな」

崇光先輩の差し出すチヨコに、いらなこと手振りで言つて、西条先輩は、うーんと伸びをした。

「なかなか立派なチヨコじゃないの。由希亜の気持ちが籠もつてゐるんだから、ちゃんと食べてあげないと、罰が当たるわよ、忍」

あやめ先輩もくすくす笑つて、受け取りを拒否した。

「お前ら、面白がつてゐだる」

苦虫を噛みつぶしたような声でそう言つと、先輩はワゴンの上の

携帯灰皿に煙草を押しつける。

「どうやつたら、これが面白がらずにはいられるか、教えて貰いたいね」

「由希亜は可愛いわよねえ。ホントに」

一人とも、完全に楽しんでいる。確かに、由希亜の先輩に対する行動は、端から見ていたら爽快感さえある程大胆で、一種の見せ物だとは思つんだけど……。

でも、由希亜はあれで大真面目なのよ。彼女は、あれでも本氣で先輩のことを好きなんだもの。4月に入学して、それ以来、ずっと崇光先輩一筋で追いかけてきてるんだから。どんなに先輩に邪険にされても、冷たい言葉を吐かれてもね。

彼女の行動は、神経が太いとか、そーゆー言葉で片づけてはいけない氣さえするわ。

本当に、由希亜って強いのよ。

あたしとは、大違ひ。

「愛花」

先輩があたしの名を呼んだ。

「はっはい！」

思考の淵に沈み込んでいたあたしは、思わずドッキリして顔を上げる。

「お前、チョコ好きか？」

こきなり名前を呼ばれて、ドキドキして返事をしたのよ。よりにもよつて、先輩は、あたしに由希亜のチョコをくれようとするの。もう、そんなの絶対、駄目ー。

「要りません！ てゆーか、バレンタインのチョコには女の子の気持ちが籠もつてるんだから、それは先輩が食べなきゃ、駄目です！」

いくら由希亜のでもね。

先輩は、あたしの剣幕に、一瞬「おおっ」とたじろいで、溜息を吐いた。そして、「俺、羽生のもあるんだけどなあ」と、爆弾発言をしたわ。

「何？ やっぱ彰の奴、お前にチョコやつたのか？」

西条先輩が大笑いをしている。

「男からもモテるとは、流石だね」

「頼むから、冗談で済ませてもらいたいんだが……」

頭を抱えて見せる先輩。けど、彰君も由希亞と一緒に、先輩のことを好きだって事は、既にみんなが知ってる。彼も、彼なんか、特に男なのに、誰の前であつても全然「先輩が好き」って態度が変わらないの。凄いと思うわ。

……あたしとは、大違い。

あたしは未だ、先輩に「好き」と伝えることも出来ていないんだもの。知っているのは、由希亞と、同じクラスの親友と、あやめ先輩だけ。

ちらりと、隣のあやめ先輩を見ると、あやめ先輩もあたしを見たわ。ううん、正確には、あたしの足下に置いてあるサブバックの中を。

あたしも、つられてバックの中に手をやると、ラッピングされたチョコケーキの箱が丸見えだつた。

ハツとしたあたしに、あやめ先輩は「あらら」とゆー顔をして、崇光先輩を一瞬見て、あたしに視線を戻したの。そして「まだ渡して無かつたの?」と、小さな声で囁いたわ。

あたしはその言葉に、「くんと頷く。

あやめ先輩は「なる程」と二三度頷いて見せ、「西条が邪魔ね」と不敵に笑つたの。

えつと……なんか怖いんですけど、その笑み。

「西条」

あやめ先輩が、思いついたように声を上げた。

「何?」

「私、今日画材店に行こうと思つた。一緒に行つてくれない」「俺?」

西条先輩が眉をひそめる。あやめ先輩から誘われることなんか無いからだと思う。あやめ先輩は、大抵、崇光先輩と一緒に行動して

るんだもの。

「忍は、今日バイトなんでしょう？ 私、もう帰らなくてはいけないの。と言つことで、西条、早速行くわよ」

やう言つと、西条先輩の返事も聞かずに立ち上がり、さつさと帰り支度を始める。

「あ、おい、白眉」

西条先輩の分まで片づけ始める、あやめ先輩に、西条先輩も帰り支度を始めるしかなくつて、そんな一人をハラハラしながら見ていたら、あやめ先輩があたしを見て、とっても可愛くウインクをして見せた。

「うひ、恩に着ます、あやめ先輩。

あたしはカンバスの陰で、思わず手を合わせてしまったわ。

「ほら、早くなさい」

あやめ先輩は、もう西条先輩の鞄まで持つて、扉の所で待つている。

「それじゃあ、忍、愛花、一人とも、お先にね」

「おい、白眉、待てよ。何急いでんだ、お前？ ……じゃあな、忍、

白石」

バタンと扉が開いて、そそくさと出て行くあやめ先輩と、それを追いかけるようにして出て行く西条先輩。そして、ゆっくりと扉が締まつた。

締まつた途端、この広い美術室の中に、先輩と一人つきりになる。

「あやめの奴、どーしたんだ？」

崇光先輩が窓の外、渡り廊下の方を見ながら、首を傾げた。

まあ、確かにいきなりな行動だつたけど、真相は、あたしとあやめ先輩にしか分からないわよね。

あやめ先輩の行為を、無にしちゃいけないわ。

こくりと、口の中に溜まつた唾を飲み込む。

静かな部屋の中に、絵筆が滑る音だけがしている。先輩は、黙々とカンバスに向かって色を塗つていて、あたし一人、……凄くドキ

ドキしてゐる。

旧校舎の一階にある美術室は、運動場の喧騒も聞こえてこない。ただ静かに、集中して絵が描ける場所なんだけど、そんな中にいるのに、あたしは、今日は全然、絵に集中なんか出来なかつた。

「お前、今日は遅くまで残つてるんだな」

どれくらいの時間が経つただろう。先輩が、うーんと伸びをして傍らのワゴンの上から煙草を取り上げた。

いきなり話しかけられて、ドキッと心臓が跳ねたわ。

結局、一人つきりだつて言うのに、あたしは先輩に話しかけることも出来ずにして、ただカンバスに向かつているだけだつたの。絵を描いていた訳でも無いのよ。だつて、全然絵を描く気持ちになれなかつたんだもの。自分が何を描いてるのかさえよく分かつて無くつて、今日描いた所は、絶対、明日見たら描き直しだわつて思う。

あやめ先輩、ごめんなさい。先輩の行為、無にしてやりました。はあー。

心の中で、あやめ先輩に懺悔しつつ、大きく溜息を吐き出す。

「頑張つてんだな」

先輩は何を勘違いしたのか、「偉いぞ」と言つて、くわえた煙草に火を点けた。一息吸つて、くわえたままで紫煙を一筋、細く吐き出す。

一瞬、泣きそうになつたわ。

先輩にチョコを渡したいから、こんな時間になつちゃつたのに。そんなことも分からぬの、先輩？

「愛花、どうした？」

「なんでも、ないです」

「ふいとせつぽを向いてみる。

「ん？」

先輩は何か言いかけて、壁に掛かった時計を見上げて、「もう帰るか？」と言つたわ。

窓の外は、もうすっかり日が落ちていい。確かに、もう帰らないといけない時間よね。

けだし、ここでチヨコを渡さなかつたら、あたし、馬鹿じやないかと思つ。昨日、お兄ちゃんの妨害にもげずに、一生懸命作つたチヨコが無駄になつちやつたのよ。あやめ先輩の行為も、無駄になつちやうつたのよ。

そんなの嫌。

「あ、……あの、先輩」

あたしは、ありつたけの勇気を振り絞つてみたわ。

「ん?」「ん?」

先輩は、くわえ煙草のまま、あたしを見て、あたしは何か言おうとして、……でも、なんて言えば言えばいいのか考えもなしに声を掛けてしまつたことに気付いて、

ああ、あたしつて馬鹿!

「あつ、あの……、あの、先輩……。あたし、あの……一緒に、帰つていでですか?」「……。

一瞬の間があつた。

あああん、もう、そんな事じやなくして、もつと他に言つことがあるでしょう、あたし。なんで言えないのかしら? なんで、いつも、すらつと出てこないのかしら?

あたしの心臓の音、凄く激しくて、もしかしたら先輩にも聞こえてるんじゃないかなって思つのに、肝心の台詞は、相手に伝えられなないの。

先輩は微かに頷いて、「いいよ。もつ暗いからな」と言つたわ。

女の子の夜道の一人歩きは危ないからつて意味だと思つ。先輩は優しいから、女の子には、特に優しいから……。

美術室の片づけをして、戸締まりをして、昇降口で待ち合わせて、一緒に帰る。

ちよつとだけ幸せ。でも、本当は

サブバックの中の箱を、先輩に渡したい。あたしの思いを、受け取つて貰いたい。

「夜は冷えるな」

吐く息が白い。

昼間はだいぶ暖かいけど、日が暮れると、まだ肌寒いわ。日の入りもだいぶ長くなつてきたけど、もう、この時間じや、辺りは真つ暗。街灯無しじや、ちょっと怖い。

隣を歩く先輩の横顔を見る。

あたしよりも背が高くて、見上げなきやいけないから、ただ横を向いただけだと先輩の胸の辺りしか見えない。内ポケットには、煙草が入つてゐるよね。側にいると、ちょっと煙草臭い。最初、美術室で先輩が絵を描きながら煙草吸つてゐた時はビッククリしたけど、実に自然に吸つてたから、他の人も何も言わなかつたから、そのうちあんまり気にならなくなつたの。いわゆる、馴れつて奴？

別に悪ぶつてるとか、不良とかじやないのよ。先輩は自然体つて言つのかしら、自分のルールで生きてるつて気がする。確かに校則には違反してゐるから、良くないことなんだろうけど、それでも、あたしは先輩のことが好き。

いつから好きかつて言つのは、よく分からぬけど、先輩のことが気になりだしたのは、ハツキリしてゐるわ。

去年の12月。

買い物に行つた帰り、電車に乗り遅れちゃつと思つて、繁華街の裏通りを近道していたら、危ない感じの人達に絡まれたことがあつたの。その時に助けてくれたのが、先輩。バイクに向かう途中だつたみたいで、本当に偶然通りかかつただけなんだけど、助けてくれた先輩は、凄く、格好良かつたの。

由希亜にそれを言つと、それはあたしの『勘違い』なんだと言つんだけどね。

あたしは『先輩』を好きなんじやなくて、その怖かつたと言う状況下で助けてくれた『相手』だから、先輩に引かれてゐるだけだつ

て。怖かつたドキドキ感を、助けてくれた相手に対するドキドキ感にすり替えてるだけなんだって。

そんな事無いって思う。だって、本当に、その時は先輩って格好いいって純粋に思つたけど、好きになつたのは、それからずっと先輩を見てきた後だもの。ずっと見てきて、いつの間にか、好きになつていたんだもの。

「先輩」

そつと呟く。

「あの、あたしを助けてくれた時のこと、……覚えてますか？」

小さな声だつたから、聞こえないかも知れない。そう思つたけど、先輩にはしつかり聞こえていて、「お前がアホな奴らに絡まれてた時のことか？」と言つたわ。

「……お前、まだあんなトコを近道とかしてんじゃねえだろうな？」

しかも怒られた。

「もうしてません。ちゃんと表通りを通ります」

ふつと膨れる。

会話が続かない。

あああ、沈黙が痛いわ。

「先輩……もし、……もしも、あたしが、また誰かに絡まれていたら、助けてくれます？」

「……俺が通りかかればな」

絞り出した台詞も、馬鹿みたい。こんなこと言つてもつもないので。

」

「……でも、お前のピンチを察して飛んでいく、なんて真似は出来ないぜ」

「ヤー、ですよね」

自戒の念に苛まれるわ。

「……何考えてるんだ？」

先輩の声も怪訝そう。

「すみません」

もう、本当に、何を考へてるんだろう、あたし。自分で自分の馬鹿さ加減を呪いたいわ。折角、先輩と一人つきりなのに、こんな会話しか出来ないし、……しかも、もう駅に着いちゃうじゃない？

角を曲がると踏切を越えて、高架を抜けたら駅はもうすぐ。もう、向こうの方に一際賑やかに明るく駅前が見える。あんな所まで行つたら、もう絶対、チョコを渡すことなんて出来ないわよ、あたし！

「愛花？」

いきなり立ち止まつたあたしを、一一歩進んだ先輩が振り返つた。人通りはあるけど、車通りもあるけど、幸い、それほど多くはなくて、少なくとも、学生の姿はどこにも無い。勿論、あたしには見えないだけで、あたしの後ろには実は大勢いの学生がひしめき合つているのかもしれないけど、……でも、でももう、あたし、ココで言わなきや、ビーするの？！って感じよね。

「あの、先輩！」

サブバックの中に手を入れる。昨日一生懸命心を込めて作った箱が、指に触れる。

「あたし、あの、先輩に……」

慌てちゃつて、巧く取り出せない。

「あたし、あの、あれ？先輩に……、あの、これ……」

引っ張り出したチョコケーキの箱、こう暗かつたら、何が何だか分からぬわよね。あれだけ一生懸命、包装紙とかリボンとか選んだのに。

「これ、受け取つて下さい！」

勢い込んでしまつた。心臓が口から飛び出しそうに脈打つて。ちょっと、差し出す手が震えちゃつてるわよ、あたし。

それなのに

この長い、長い沈黙は、ビーして？

先輩は、固まつたみたいに動かなくて、あたしの差し出す箱を受け取つてくれなくて。

「えつと、愛花」

先輩、困惑してるの？

突然だつたから、当然の反応だとまと思つたが、お願い、受け取つて下せい！

「……お前、マジか？」

なんだか先輩の反応がおかしいわ。

「本気ですよ！」

思わずムキになつてしまひ。

「なんだ、そんな事言つんですか？！」

「ここまでキドキしてチヨロを差し出したのに、その反応は無いでしょ？ちよつとあんまりだと思うわ。

先輩は、あたしの剣幕にちよつとたじりいで、「いや、だつて、お前いつも由希亞と一緒にいるから」と言ったの。

聞いた瞬間、田の前が、くらつとしたわ。

それはつまり、由希亞の陰に隠れて、あたしの存在つてものは眼中にさえなかつたつて事よね？

「由希亞は、関係ありません！あたしは、あたしとして先輩のこと……」

前半の台詞は勢いが良かつたのに、後半の台詞は、かーっと照れちやつて、思わず口籠もつちやつた。

「愛花……」

でも、先輩は分かつてくれたみたい。当惑した顔は相変わらずだけど、微かに微笑んだ。

「もしかして、それを渡したかつたから、今日残つてたのか？」  
じくりと頷く。

「馬鹿だな」

馬鹿つて言われた。

ええ、ビーせ馬鹿ですよ。由希亞みたいにジャンプして先輩の首つ玉にしがみついて、チヨロを押しつけるなんて真似出来ませんよ。それでも、それでも、あたしだつて由希亞に負けないくらい、先輩のこと『好き』。

「由希亜も、知ってるのか？　お前の」と

もう一度、こくりと頷く。

先輩は「なる程」とか呟いて、「喧嘩になつたりとかしない訳？」と素朴な疑問を口にしたわ。

「由希亜は、先輩が誰のことを好きだつと、先輩が好きなんですよ。だから、他の誰が先輩のことを好きになつたとしても、彼女の気持ちは変わらないんです。だから、大丈夫です」

説明してしまう。ライバルなのに、由希亜の気持ちは、どことなく分かるから。あたしも、他の誰が先輩のことを好きでも、先輩の事が好きだもの。

「そつかー、由希亜のは、マジなのか。やっぱり」

思わず考え込む先輩。もしかして、由希亜の猛烈アタックは、全然先輩には伝わっていなかつたつてことなのかしら？

そう思つと、由希亜って可哀相かも……。

「で、お前が俺をつてーのは、やっぱアレか？　あの時、俺がお前を助けたからか？」

見下ろされる視線が痛い。

あたしは、三度、こくりと頷いた。先輩も微かに頷くと、人差し指を立てて諭すようにして、「お前のそれは『勘違い』なんじゃあ……」と言いかけたわ。

「先輩、由希亜と同じ事を言つてますよ」

先輩の台詞を途中で制するのは気が引けるけど、先輩がそんな事を言つなんて頭に来ちゃう。あたし自身が、そんな事は無いつて分かつてゐるのに。

「うわ？！俺、由希亜とレベルが一緒かよ……」

あたしの台詞に頭を抱えて呻いてる先輩が可愛いから許すけど、今度そんなことを言つたら、絶対、あたし泣いちゃうから。

「先輩。これ、受け取つて下さい」

あたしは、今度は落ち着いて、ハツキリとそつと言ふたわ。

先輩は頭を抱えたまま、あたしを見て、しばらく何か考えていて、

でも、やつと受け取つてくれたの。

手渡す時、やつぱりちょっとドキドキしちゃつた。

先輩は片手で箱の重さを確かめるみたいに微かに振つて、「重いな」とか呟いたの。

「中身、何？ つて、チョコレートか。美味しいのか？」

自分の台詞にセルフツイッコミして、あたしの顔を覗き込む。

「それは、あたしの手作りだから……美味しいかどうかの保証はありません」

先輩の目が怖いわ。別に睨まれるとかじゃないのに、どうしかつていうとからかれてるに近いのに、そんな目で覗き込まれると、ドキドキして震えそうになるほど、怖い。

なんでそんな目をして、あたしを見るんですか？  
もう、恥ずかしい。

「手作り？ これ、愛花が作ったのか？」

手の中の箱を田の高さまで持ち上げて、まじまじと見つめている。

「そうです」

なんか照れちやうわよ、その反応。

「そつかー」

先輩は感慨深げに領いて、「それじゃあ、これは俺が食べなきやなあ」とつて言ったの。

えつ？ とゆーことは。

「先輩、由希里のとか彰君のとかは、……食べないんですか？」

「うん。バイト先の店で客に出来うがと思つて」

あつれつと叫う。

「俺、甘いもの駄目だから。貰つたチョコレートいつもバイト先で出してんだよな」

極悪非道のことを、平氣で言つ。

ヒドい、ヒドイわよ、それ。女の子の気持ち、まるつきつ無視してゐる。

「最低ですね、先輩」

うう、自分で作ってて良かつた。てか、自分で作ろつと思つて良かった。

思わず、お祈りしちゃつ。

「そつかー？」

先輩はチョコの箱をバックに仕舞うと、歩き出した。

「俺、普段からチョコは食わないって言つてんだぜ。それなのに俺にチョコをくれるってのは、悪意さえ感じじるぜ。喧嘩売つてると思われないだけ良いと思つて貰わない」と

何ですか、その言い方？

「そんなこと無いです！ あたし、そんなつもりじゃないですからね！」

小走りに追いつくと、並んで歩きながら先輩を見上げる。

「今日はバレンタインデイなんですよ、先輩。女の子が好きな男の子にチョコを渡す日なんです。だから、みんなチョコを渡してるんですよ。先輩がチョコが苦手なのは知つてます。それでも、普段気持ちを伝えられない女の子は、今日と言つて、チョコを利用するしかないんですよ。今日のチョコは、普段のチョコとは全然意味が違うんですから。……それなのに、受け取つても食べてあげないなんて、ヒドイです！」

「力説するなあ、愛花」

歩きながら、先輩が苦笑してる。

だつて、だつて、あたし……。

「お前が俺に喧嘩を売つてるとは思つてないよ、愛花」

見上げるあたしを見下ろして、にやりと笑う。

その顔を見ると、なんだか、急に自分でも恥ずかしくなつちゃつた。

何をムキになつてるのかしら、あたし？

火照つた頬を両の手で包むと、もう何を言つていいのか分からなくなつて、前を向いて黙々と歩いてしまつ。

そんなことをしたら、程なくして駅に着いたの。

あたしが乗る電車は、まだ来ないみたい。でも、先輩が乗る電車は、もうすぐ来るんだって。ホームに出ると、電車が入ってくるとアナウンスがあった。

先輩は、もう何も言わない。人の目があるからかしら、あたしの事も、見てくれない。

でも、あたしは、もうちょっと先輩と話してみたいと思つて、声をかけたの。

「あの、先輩！」

「ん？」

先輩は、ゆっくりとあたしを見たわ。小首を傾げるようにして、あたしのことを見下ろすの。長めの前髪が、顔に影を落としている。無口で無愛想で、格好良い人つて言われるよか、怖い人つて言われることが多い先輩なんだけど、こうした何気ない雰囲気は、凄く柔らかい。

先輩の描く絵みたい。

「あつあつ……」

あたしは、また少し口籠もつちゃつて、でも、これだけは言いたくて、

「今日は、あの、チヨコ……貰つてくれて、ありがとうございます」と

ペコり。

お辞儀をしちゃつた。

……。

先輩は一瞬、少し垂れ気味の切れ長の目を細めて、くすつと微かに笑つたわ。

そして、あたしに向かつて手を伸ばしたの。

あたしは身動き出来ずに立つていて、先輩の手があたしの頭に触れる時、ちょっと体に緊張が走つちゃつた。

けど、先輩は、ポンポンつて軽くあたしの頭を叩いたの。すつごく優しい感じにね。

美術室の裏に居ついてる野良にやんこの頭を撫でてやる時みたいに感じに、凄く暖かくて、大きな手で。

体の緊張が一気に解れて、先輩の手から温もりが伝わってきて、あたしの中が、幸せに満たされていく気がしたわ。

ぱーっとなつたあたしに、先輩は、「返事は、一ヶ月後な」って言ったの。

一ヶ月後?……ホワイトデイ。

「期待すんなよ」

そう言って手を離したけど、……駄目。そんなこと言われても、絶対、駄目よ。

あたしも、期待なんかしちゃいけないって、そう思つけど、でも、もう絶対、あたし先輩のこと……、好きだもん!

「します!」

電車が入つて来たわ。ホームに滑り込む電車の音に負けじと、あたしの声も、知らず大きくなつてしまつ。

「あたし、期待して待つてます!」

こんな優しい顔してくれる先輩、他の誰にも渡したくないもの。プシュー。

圧搾空気の音がして、扉が開いた。

「だつて、あたし……あたし、先輩のこと、好きですからー!」

言つちやつた。

言つた途端、かーと耳まで赤くなつたのが分かつたわ。

こんな、駅のホームで言うことじゃないわよね。電車の中から吐き出される人達と、乗り込んでいく人達。周囲にいた人達が、一瞬あたしの方を見たのが分かつたわ。

うちの学校の人はいないみたいだけど、それでも、恥ずかしい。今まで部活で一人つきりでいたのに、ジーしてこんな所で言わなきやいけないの?

我ながらタイミングつてものを外しすぎだと思つ。

それは分かつてゐけど、でも、言つちやつたものはどうしようも

無いわよね。

先輩は、ちよつと困つたような顔してて、……ああ？！この電車に乗るつもりだつたのよね、先輩は？

「ううへ、うめんなさい、先輩ー。あたし、あのつー。」

悪かったとは思うわ。でも、あたし、言っちゃいました！

惜て泣かぬかが少し  
なあつて、玄いとの。

その声の色に、少しだけホッとする。

でも、ううん。全然、あたしなんか、全然強くない。

だから、言うの。

今日はバレンタインデイなんだもん。女の子が、ありつたけの勇

ない手は無いわ。

わざがけとか無くして、自分でサバンヌを作ること出来なくて、どうやら、今田さん

は堂々と自分の気持ちを林三に伝える。この思いを、チヨコに込めて、皆田である。

今田が糸三川レー工業社の策略で生みれた田たつで、なんたつでいいの。あたしみたいな、普段、相手に気持ちを伝えることが出来ない女の子には、どれだけこの田が有り難いか知れないんだから。

好さ

たつた一言なのに、口に出すのに凄く勇気のいる言葉。目の前にいる相手に伝える為に、どれだけの精神力がいるのか分からなくなる、ドキドキしてしまう言葉。

伝えたくても伝えられなくつて、何度溜息を吐いたか分からなくて、何度泣きそうになつたか分からなくつて、でも、伝えなきや何も始まらない言葉だから……。

たから、言ひ

今日はバレンタインデイなんだもん。あたし達、臆病な女の子の

後押しをしてくれる日なんだもん。少しだけ、勇気を貸してくれる日なんだもん。

だから、今日は、あたし、言えるの。

「あたし、……先輩の」と、好きです」

【エンド】

(後書き)

以前、バレンタインデイなんかいらない派の友人（ ）と喋っていた時の会話が元になつております。

彼は今も元気にチョコを貰えないこの日を過ぎてしているのでしょうか？・・・（遠い目）。

え？私ですか？・・・私は、勿論バレンタインデイは、いる派です。チョコは嫌いなくせに、こーゆー甘甘イベントは好きなんです（笑）。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6384d/>

---

頑張れ女の子

2010年10月8日15時44分発行